わが国の循環器疾患予防の視点：NIPPON DATA の知見から

上島 弘嗣

滋賀医科大学 生活習慣病予防センター

かつて、わが国は脳卒中死亡率が世界で最も高い国であった。1965年を頂点として、その後、脳卒中死亡率は1990年にかけて80%以上減少し、懸念された虚血性心疾患の増加を見ることなく世界一の長寿国となった。しかし、欧米に比し、脳卒中が多く虚血性心疾患が少ないわが国の循環器疾患の特徴は、現在においても同じである。そのため、わが国の循環器疾患の危険因子は欧米と異なるのではないかという議論もあった。NIPPON DATA (National Integrated Project for Prospective Observation of Non-communicable Disease And its Trends in the Aged)は、それに対する一つの答えを与えた。

NIPPON DATAは、断面調査であった厚生労働省の循環器疾患基礎調査1980年と1990年のものを、二つのコホートとして新たに追跡したものである(NIPPON DATA80 および NIPPON DATA90)。NIPPON DATA80・90は、国民を代表する大規模な集団(30歳以上の男女、それぞれ、約1万人、8,000人)について、長期間追跡している点、およびその追跡率が90%以上と高い点において優れている。死因は日本の人口動態統計の原死因を用いており、その意味で、真に日本人の死亡とその死因の実態、危険因子を解明するにふさわしい追跡調査となっている。

現在までに、①血圧水準が高くなると循環器疾患死亡リスクが順次高くなること、②血清総コレステロール値と心筋梗塞の段階的な正の関連、③低コレステロール者からの癌死亡率が高いのは肝癌・肝疾患によるものであること、④喫煙の肺癌、循環器疾患死亡、脳卒中死亡、心筋梗塞死亡との正の関連、特にエビデンスの欠落していた喫煙と脳卒中リスクの関連、⑤喫煙と平均余命の短縮、⑥リスクの集積と循環器疾患との関連、⑦メタボリックシンドロームと循環器疾患死亡リスクにおいて、肥満の有無よりも耐糖能異常の有無がより重要であること、⑧高血圧既往歴の重要性、⑨栄養の指標としての身長と脳卒中死亡危険度との負の関連、⑩HDLコレステロールと心疾患死亡との負の関連、⑪随時血糖値と循環器疾患リスクとの関係、⑫男女の循環器疾患リスクの相違が喫煙、高血圧にある点、⑬心電図所見と循環器疾患、⑭都市農村部と循環器疾患のリスクの相違、等を明らかにした。また⑮Framinghamスコアに該当する循環器疾患リスク評価チャートを作成した。

これらの結果より、わが国の循環器疾患の危険因子は欧米のものとは異なるものではないことが明らかとなった。そして、NIPPON DATAの成果は、「健康日本21」作成における基礎資料として、また、日本高血圧学会の「高血圧治療ガイドライン2004、2009」、「動脈硬化性疾患予防ガイドライン2007年版」に、重要なエビデンスとして生かされた。